『ハムレット』に見る不幸の諸相

松　田　　理

The Variety of Unhappiness in *Hamlet*

Osamu MATSUDA

『ハムレット』はシェイクスピアの代表的悲劇のひとつと考えられているが，それは人間の不幸が明確な主題となっていることが誰の目にも明らかだからである。この小論ではシェイクスピアが不幸と考えるものを分析し，不幸について彼がどのような認識を持っていたかを知る手がかりとしたい。まず，作品全体に散りばめられた不幸を拾い集め，それぞれの不幸の性質及びそれがいかなるタイプの不幸に属するかを考えることから始めたい。

『ハムレット』は『マクベス』より5年前に書かれた作品であるが，ともに王位簒奪にまつわる劇なので両者には少なからず類似した点がある。

『ハムレット』において最初に提示されるのは，ハムレットの父である先王の不幸である。暗殺された先王の亡霊がハムレットに復讐を命じることで，先王の身に降りかかった不幸がハムレットに知らされるのと同時に観客にも知らされる。亡霊の言葉によれば，先王の弟である奸智奸才にたけたクローディアスが王妃ガートルードを邪淫の床に誘い，王妃と王位を手に入れんがために先王を毒殺したというのである。先王の不幸はクローディアスの欲望によってもたらされたものであり，先王自身の欲望や過失が招来したものではない。それは『マクベス』におけるダンカン王の場合と同じである。先王の人格・容貌はいささか類型的とも思われるほど勇猛高潔で非のうちどころがない。

See what a grace was seated on this brow,
Hyperion's curls, the front of Jove himself,
An eye like Mars to threaten and command,
A station like the herald Mercury
New-lighted on a heaven-kissing hill,
A combination and a form indeed
Where every god did seem to set his seal
To give the world assurance of man.

（3幕4場）

しかし敢えて先王の側に不幸の原因を求めるならば，完全無欠の王として国事に専念するあまり，国民の誰からも慕われることに疑いを抱き得なかったことがその原因ということになろう。国王として国民から慕われることと，夫として妻から慕われることは全く同じというわけではない。夫のほうから妻に歩み寄るという姿勢が欠けていれば，妻も人の子，その心の隙に他の男がつけ入ることは可能である。クローディアスはそのようにしてガートルードの心を奪い，先王の命と王国を奪ったのである。したがって，先王の不幸は，なによりも王としての彼の優れた資質に起因しているといえる。王として職務遂行に邁進する男の背後に生じるわずかな負圧。その負圧が不幸を引き寄せてしまったのである。彼の不幸は言わば，「人間の長所に起因する不幸」である。

二番目に提示されるのはハムレットの不幸である。彼の不幸は，要素となる幾つかの不幸から成り立っている。まず第一の不幸は，父を実の叔父に殺されたこと。第二の不幸は，母の不

貞。第三の不幸は，復讐を遂げるため恋人オフィーリアを欺かねばならぬこと。その結果彼女を死に追いやること。第四の不幸は，復讐を遂げたものの，自らも命を落とすことである。第一の不幸と第二の不幸は，いかなる意味においてもハムレットには責任の無い不幸である。それらは，言わば，降って湧いた不幸である。第三の不幸は，復讐という目的のためにハムレットが自ら払うことを決めた，代償としての不幸である。世間を欺くために精神錯乱を装い，オフィーリアには心変わりしたと思い込ませたのであるから。彼にとってそれは目的のために耐えねばならぬ不幸であった。しかし，オフィーリアにとってそれはまさに降って湧いた不幸であり，のちに彼女の父の死が追い打ちをかけ，彼女の精神的許容度を越えてしまう。結局オフィーリアは精神錯乱のすえ水死する。ハムレットは恋人の死という，予想外の不幸をも招来してしまったのである。第四の，ハムレットの死という不幸は直接的には御前試合の剣に毒を塗ったレアティーズによって引き起こされたものであるが，実はハムレットが父の死因を知り，復讐を決意したことに既にその原因がある。ハムレットの危険な意図を知ったクローディアスがレアティーズを焚きつけ，ハムレットを亡きものにすべく御前試合を提案したのであるから。父が耳に毒を注がれて殺されたのと同様に，ハムレットは父の亡霊によって耳に復讐という毒を注がれていたのである。

Ghost. Revenge his foul and most unnatural murder.
Ham. Murder!
Ghost. Murder most foul, as in the best it is,
But this most foul, strange and unnuatural.
Ham. Haste me to know't, that I with wings as swift
As meditation or the thoughts of love
May sweep to my revenge.
Ghost. I find thee apt.
And duller shouldst thou be than the fat weed
That roots itself in ease on Lethe wharf,
Wouldst thou not stir in this.

（1幕5場）

結局ハムレットの不幸は二つの種類に分けることができる。第一の不幸と第二の不幸はともに彼にとっては「不可抗力の不幸」である。第三の不幸と第四の不幸はいずれも先王の暗殺を発端に因果関係を持って連続しているので，「不幸が招く不幸」と呼ぶことができる。不幸から逃れるため，もしくは不幸を解消するためにハムレットは新たな不幸を招来したのであるから。シェイクスピアはハムレットを使って，罪の無い一人の人間に極めて深刻な不幸がいくつ降りかかり得るかという実験を行っているようにさえ思える。しかしハムレットの不幸はその数がいかに多くとも，マクベスの不幸とは異なり，我々観客の悪夢とはなりえない。我々はマクベスの不幸にうなされることはあっても，ハムレットの不幸にうなされることはないのである。マクベスは欲望と罪という鍵を使って我々の心理の奥深くに侵入するが，罪の無いハムレットにはそれができない。我々とハムレットとの間には常に一定の距離が保たれ，劇全体が不幸の見事な陳列棚と化すのである。

三番目に提示されるのは，クローディアスの不幸である。彼の不幸は，その原因においても結果においてもマクベスのそれと似ている。彼の第一の不幸は王妃ガートルードを自分の妻にできぬこと，そして自分が王になれぬことであった。第二の不幸は先王の暗殺及びガートルードとの密通をハムレットに気づかれたことである。第三の不幸は，ガートルードを失い，自らの命も失うことである。第一の不幸は，欲望と野心が満たされぬという不幸である。それは『マクベス』におけるコーダの領主の，そしてマクベス本人の不幸と同種のものである。国王の暗殺は極めて危険な賭けであるから，敢えてそれを行うからには，満たされぬ欲望と野心が耐え切れぬ不幸としてクローディアスにのしかかっていたことになる。それから逃れる手段として

の国王暗殺であったが，ハムレットの気づくところとなり，第二の不幸が生まれる。それは不安と恐怖の生き地獄である。クローディアスの場合，罪の意識が強く，また客観性も備わっているのでその苦悶はまさに悲劇的である。

The harlot's cheek, beautied with plast'ring art,
Is not more ugly to the thing that helps it
Than is my deed to my most painted word.
O heavy burden!

（3幕1場）

ハムレットの突然の変わりようが納得できないクローディアスは，殺人犯特有の心理で，その原因をつきとめずにはいられない。他愛もない原因であってくれればと祈りつつ一縷の希望を託し，彼はハムレットの幼友達ローゼンクランツとギルデンスターンに命じてハムレットの心中を探らせる。その矢先，ハムレットが仕組んだ劇中劇が国王暗殺の場面を演じ，クローディアスの希望は微塵に打ち砕かれる。マクベスが魔女たちの予言に託していた希望を打ち砕かれたようにである。身の危険を感じた彼はハムレットをイギリスに派遣し，イギリス人の手で葬る手筈を整える。しかし新たな殺人計画を立てながら，クローディアスはなおも罪の意識に苛まれる。邪悪な方法で手に入れたものを手放したくはないが，罪はあまりにも心に重く，神に許しを請うほかに救われる道はない。しかし，そのような身勝手が通るはずはないと自問自答を繰り返しながら。

O, my offence is rank, it smells to heaven;
It hath the primal eldest curse upon't——
A brother's murder. Pray can I not,
Though inclination be as sharp as will,
My stronger guilt defeats my strong intent,
And, like a man to double business bound,
I stand in pause where I shall first begin,
And both neglect. What if this cursed hand
Were thicker than itself with brother's blood,
Is there not rain enough in the sweet havens
To wash it white as snow? Whereto serves mercy
But to confront the visage of offence?
And what's in prayer but this twofold force,
To be forestalled ere we come to fall
Or pardon'd being down? Then I'll look up.
My fault is past——but O, what form of prayer
Can serve my turn? 'Forgive me my foul murder?'
That cannot be, since I am still possess'd
Of those effects for which I did the murder
——
My crown, mine own ambititon, and my queen.

（3幕3場）

クローディアスの極悪非道の罪は，悪魔のごとき人格の所産ではない。それは悪魔になりきれぬ人格が恐れ戦きつつも決断を余儀なくされる選択の軌跡である。それ故に彼の苦悶は観客にとって他人事ではない。彼の苦悶は即ち我々観客の悪夢なのである。

O wretched state! O bosom black as death!
O limed soul, that struggling to be free
Art more engag'd! Help, angels! Make assay.
Bow, stubborn knees; and heart with strings of steel,
Be soft as sinews of the new-born babe.
All may be well.

（3幕3場）

この意味でクローディアスの人格描写は，主人公ハムレットのそれよりも迫真性において勝っているとさえいえる。第三の不幸はいずれも偶発的要素が強い。ガートルードは誤って毒杯をあおり命を落とす。その毒杯はハムレットを殺

すためにクローディアスが用意したものであった。そしてクローディアス自身も毒を塗られたハムレットの剣を受けて命を落とす。その剣はハムレットを殺すためにクローディアスが選んだ先止めをしていない剣で，レアティーズが毒を塗ったものであった。第三の不幸については特に顕著であるが，クローディアスの不幸は総じて因果応報の色彩が濃い。彼の不幸は敢えて一言で言うならば，「不幸が招く不幸」ということになる。

四番目の不幸は，クローディアスの不幸と同時に提示されるガートルードの不幸である。彼女の不幸の要素は本質的には一つだけである。それはクローディアスとの不義密通，加えて先夫を殺した男の妻となったことに起因する良心の呵責である。

Queen. O Hamlet, speak no more.
Thout turn'st my eyes into my very soul,
And there I see such black and grained spots
As will not leave their tinct.
Ham. Nay, but to live
In the rank sweat of an enseamed bed,
Stew'd in corruption, honeying and making love
Over the nasty sty!
Queen. O speak to me no more.
These words like daggers enter in my ears.
No more, sweet Hamlet.
Ham. A murderer and a villain,

（3幕4場）

ガートルードの不幸はこの劇においてさほど大きな比重を持たないが，彼女が不幸を招来するメカニズムはなかなか興味深い。彼女の夫であった先王は能力の点でも人格の点でも国王にふさわしい人物で，彼女も彼から愛されていた。彼女は女として最高の地位につき，申し分のない夫を持ち，子供にも恵まれ，貞節の鑑と見えた女であった。その彼女の心を惑わせたのがクローディアスである。彼の奸智奸策をもってすれば貞節の鑑を心変わりさせることすらもたやすい。彼女の心理をクローディアスは手に取るように読むことができるのである。社会的に登り詰め，何不自由の無いが故に生じる一種の閉塞感。それは当の本人さえもほとんど意識せぬ微かな埋もれた憂鬱であるが，それをクローディアスは捉え，彼女の意識の表面へと引きずり出したのである。その手法は，魔女達がマクベスの微弱な野心を意識の表面まで押し上げた手法と同じである。マクベスの場合，国王暗殺を実行に移すには夫人の教唆が必であったが，ガートルードが不貞を働くに際しては『マクベス』における魔女とマクベス夫人に相当する二つの役割をクローディアスが一人で演じている。即ちクローディアスはガートルードの心の揺らぎを作り出し，それを増幅したのである。したがってガトルードの不幸はマクベスの不幸と同様に「組み合わされる相手によって不運にも掘り起こされる不幸」と言うことができる。

五番目に提示されるのはオフィーリアの不幸である。彼女の不幸は三つの要素から成っている。第一はハムレットにつれなくされること。第二は父をハムレットに殺されること。第三は気がふれて溺死することである。クローディアスに復讐するため狂気を装うハムレットは，愛しいオフィーリアに冷淡に接するばかりか，母の不貞に対する悲痛な怒り故に女性に対する不信感を露にする。

Ham. Ha, ha! Are you honest?
Oph. My lord?
Ham. Are you fair?
Oph. What means your lordship?
Ham. That if you be honest and fair, your honesty should admit no discourse to your beauty.
Oph. Could beauty, my lord, have better commerce than with honesty?
Ham. Ay, truly, for the power of beauty will sooner transform honesty from what it is to a bawd than the force of honesty can translate beauty into his

likeness. This was sometime a paradox, but now the time gives it proof. I did love you once.

Oph. Indeed, my lord, you made me believe so.

Ham. You should not have believed me; for virtue cannot so inoculate our old stock but we shall relish of it. I loved you not.

Oph. I was the more deceived.

Ham. Get thee to a nunnery. Why, wouldst thou be a breeder of sinners?……

（3幕1場）

オフィーリアの第一の不幸の特徴はそれを招来する原因が彼女の側に全く存在しないことである。美徳以外のものを持たぬ彼女にとって，その不幸は「降って湧いた不幸」である。そして彼女は不幸を嘆きはするが，それから逃れる手段も決断力も持ち合わせていない。そこに父の死という第二の不幸が追い打ちをかけ彼女の精神的許容度を越えてしまう。第二の不幸もまたハムレットによって偶然引き起こされたもので，彼女には何の責任も無いものである。しかし第三の不幸については彼女にその原因が無いとは言えない。あまりにも純粋で，あまりにも無力だったことが原因なのである。だからといって彼女を責めることはもちろんできない。それは若さ故の純粋さであり，経験不足故の無力だからである。我々観客はオフィーリアの死について不憫の情を禁じえない。彼女の純粋さと無力が我々の郷愁を呼び起こし，彼女の不幸が郷愁の彼方の我々の悪夢を蘇らせるのである。オフィーリアの性格描写は平板のそしりを免れないかもしれないが，それが悲劇の現実性を損なっているとは言えない。シェイクスピアは悲劇のひとつのタイプをいとも容易く，存在感を持って描いて見せるのである。彼女の不幸を分類するなら，不憫の色彩の濃い「降って湧いた不幸」と言うことができる。

最後に提示されるのはオフィーリアの兄，レアティーズの不幸である。父をハムレットに殺され，妹もハムレットによって狂気に追いやられた彼は，クローディアスがそそのかすままにハムレットに対する復讐を決意する。そして御前試合の際，自分が毒を塗っておいた剣で傷つき命を落とす。彼にとって父の死と妹の狂気はともに「降って湧いた不幸」である。しかし彼自身の死は異なる種類の不幸である。二つの「降って湧いた不幸」の真の原因を知らされなかったことが理由で引き起こされる不幸なのである。ハムレットが彼の父を殺したのは，クローディアスと勘違いしてのことで，もとはと言えばクローディアスがハムレットの父を暗殺したことが原因である。またオフィーリアの狂気も，直接的にはハムレットが引き起こしたものであるが，やはりクローディアスがハムレットの父を暗殺したことに起因している。しかしクローディアスは真実の一部のみを語るという方法でレアティーズの復讐心と正義感を煽る。それは魔女達がマクベスの野心を煽ったのと同じ方法である。

King. Now must your concience my acquittance seal,
And you must put me in your hart for friend,
Sith you hve heard, and with a knowing ear,
That he which hath your noble father slain
Pursu'd my life.

（4幕7場）

レアティーズの不幸は，分類するなら「不幸が招く不幸」ということになるが，彼が唆され利用されたという要素を無視するわけにはいかない。

『ハムレット』は不幸の陳列棚とも言えるほど多くの不幸を我々に見せてくれるが，それらすべての発端となるのはクローディアスの邪悪な欲望である。これらの不幸は一本の糸に通された幾つもの真珠のように，クローデアスの罪によって整然と繋ぎあわされていて，あたかも見事な工芸品を見るかのようである。ここでもまた我々はシェイクスピアの名人芸に脱帽する

ほかはない。

註

テキストはアーデンシェイクスピアの『ハムレット』を使用。本文の引用はすべてこの版からであり，幕，場数は引用に続けて括弧に入れて示す。